

施設「もやい」における知的障害者へのコミュニケーション支援

—はたおりグループの実践例報告—

古橋由実子 (社会福祉法人湘南の風 もやい)
小林倫 (社会福祉法人湘南の風 もやい)
竹下洋久 (社会福祉法人湘南の風 もやい)

要 旨：はたおりグループとは、利用者平均年齢 25,2 歳、障害種別はダウン症 5 名（内聴覚障害 1 名）、重度の知的障害 4 名（脳性麻痺、レット症候群、小頭症、レノックス症候群）、軽度の知的障害 1 名という、計 10 名（男 4、女 6）の様々な障害のある方が混在するグループである。IQ は測定不能 3 名、20 以下 2 名、21～35 の方が 3 名、資料無しが 2 名と、重度の方が多いグループとなっている。はたおりグループにおける主な作業種目は、はたおり、キャンドル製品作り、銅線（電線の皮膜剥き作業）である。今回報告するのは、はたおりグループ内における、コミュニケーション支援に関する取り組みである。はたおりグループは、通常 4 名の職員（男 2、女 2）が援助に当たり、個々の状態に応じて情報提供や声の掛け方等に配慮し、取り組みを行なっている。コミュニケーションにおいても同様に、個々に合わせた支援を行っている状況である。以下に、具体例を織り交ぜ、コミュニケーション支援実践例を報告させていただく。

Key Words： 構造化、視覚情報、スケジュール、達成感、役割

I. 援助者側から利用者へ、 情報を正しく伝える取り組み

1. 場所の構造化

構造化、というと、自閉症の方への支援を思い浮かべる方が多いかと思われるが、我々の住む社会も構造化されたものである。はたおりグループでは、自閉症ではない知的障害のある方の活動場所にも、構造化を意図的に取り入れている（図 1）。

一人 1 台ずつ専用の机を用意し、他者の動き・物品が気になる方へは、机と机の間に間仕切りを設置し、視覚刺激を制限している。また、各自に専用の棚を設け、当日行なう必要な物品のみを提示している。常に同じ場所に同じ物品を提示することで、自発的に準備・片付けが出来るよう工夫を行っている。



図1 はたおりのへや

2. スケジュールの提示

当グループにおいて、言語のない方、サインを用いる方、言語のある方、それぞれの理解度に応じてスケジュールの提示を行っている。まず、言語のない方へのスケジュールの提示方法

について説明していきたい。

言語のない方への情報の提示方法について、声かけによる提示では援助者側の意図を伝えることが難しい状況であった為、視覚的に理解しやすい構造化された環境を用意した上で、個々の理解度にあわせてスケジュールを伝えている。

言語がなく、画像を抽象化することが困難な方へは、現物を提示し、次に行う作業を伝えている。言語のない方で画像理解が出来る方については、カードを用いて情報の提供を行う。図2を見ていただきたい。言語のない方で、画像理解が出来る方の机である。机の上にはスケジュール表、スケジュールカード入れが置いてあり、机の前の壁にカードかけを用意している。1つのスケジュールにつき1つのカードを用意し、カードを縦に並べ、上から順に午前のスケジュールを提示することで、昼食まで何をするのか、見通しがつくようにした。



図2 言語のないダウン症の方の机

画面左より：スケジュール表、カード入れ
コーヒーカップ

画面左上：カードかけ

スケジュール表の一番上からカードを1枚取り、机の前に用意されたカードかけに貼り、カードで示された作業を行う。1つのスケジュールを終了すると、カードかけからカードを取り、机の上に置かれたカード入れにしまうようにしている。カードかけにカードを貼る事で、現在行うスケジュールが明確になる。このような取り組みを実践した結果、常に指示を待っている状態の言語のない方が、カードの提示により自ら行動を起こすようになる等、効果が見られ

ている。

次に、サインを用いる方へのスケジュールの提示方法について述べていきたい。

図3は手指によるサインを用いる方の週間予定表である。その方が用いるサインを絵で表し、スケジュールを伝えているもので、本人の机の前の壁に貼り、提示している。スケジュールを終了すると、本人と職員で終了したことを手指によるサインで確認してから、×印をつける。また、一日のスケジュールをより理解しやすいよう、本人が使う頻度の多いサインをカードにした。本人の机にスケジュール表を置き、サインカードを縦に並べ、上から順に一日のスケジュールを提示している。予定をサインカードや写真で表すことで、視覚的に一日の流れを理解できるようにしてある。カードだけを見て行動するのではなく、カードを見て、サインで確認や報告をする等、手指によるサインと併用しており、カードがコミュニケーションの補足的な役割を果たしている一例である。取り組み以前は混乱が多く、つねりが多発する状態であった方が、サインとカードを併用し、スケジュールを伝える取り組みを行なった結果、つねりの回数が減少し、スケジュールに沿って行動できるようになってきている。

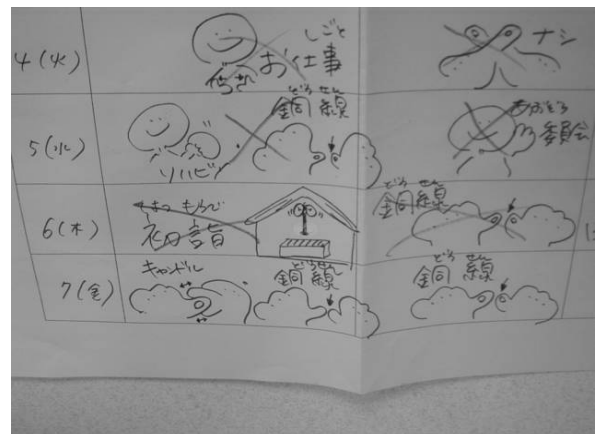


図3 手指によるサインを用いる方の週間予定表

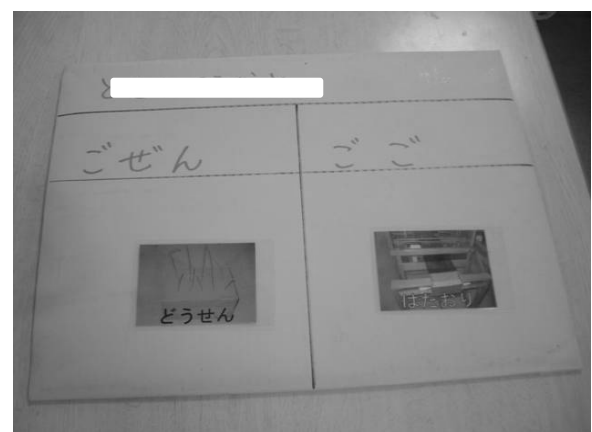


図4 聴覚障害を伴うダウン症のスケジュール

図4は聴覚障害を伴うダウン症の方（聾学校卒業）のスケジュールである。写真と平仮名を理解できるため、このような提示方法となっている。この方は口話サインや簡単な手話を用いてコミュニケーションを行う方で、口話サインや手話と写真カードを併用する事で情報が伝わりやすく、理解しやすいようである。

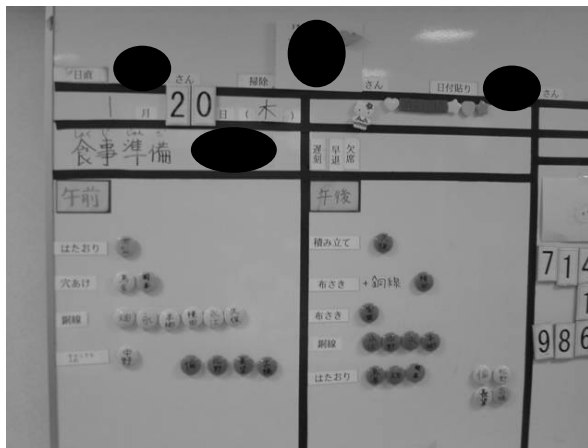


図5 言語のある方へのスケジュール提示：
ホワイトボード

言語のある方へのスケジュールの提示方法については、ホワイトボードを使用している。ホワイトボードを午前・午後に分け、そこにはその日の活動名が書かれており、活動名の横に、名前マグネットを貼っておく（図5）。言語があり文字を理解する方は、ホワイトボードに提示された名前マグネットと活動名を見て、当日の活動を理解している。

3. 量、作業準備、作業方法の提示

作業を行う上で、一体どのくらいの量を行えば終了となるのか、作業道具はどこに置いてあるのか、どのようにその作業を行えばよいのか、がわからないままでは、いくらスケジュールを提示され、一日に見通しがつくようになったとしても、特に障害の重い方にとっては、混乱を招く要因になるであろう。そこで当グループにおいて、量、作業準備、作業方法についてどのように情報を伝えているか、具体的な例を報告していきたい。

まず、どのように作業量を提示しているか、である。図6は言語のないダウン症の方の銅線作業道具である。作業道具セットは、トレーに必要な物品（ピーラー、ゴミ箱、銅線入れ、銅線ジグ）を予め用意しておく。ジグに差し込んだ銅線の本数がそのとき行う量となっている。このジグを使う方は自分でジグに銅線を差し込み、作業を開始しており、数の概念がな

くてもジグの穴全てに線を差し込むという動作を行うことで、必要な本数を自ら用意することが出来る。図7は、指定された数の分だけ銅線を用意するためのジグである。穴の下には数字が振ってあり、多少数字の理解のある方が使っている。本人は指定された数字まで銅線を差し込み、銅線作業準備を行う。正しく準備されていると、職員は「ちゃんと準備できてるね。すごい」等、口頭で評価を行っている。こうしたことを繰り返した結果、本人は、準備できたことを自ら職員に報告するようになってきている。

銅線作業以外の量の提示法については、利用者一人一人の作業ペースに応じ、作業時間内に行う量を箱やカゴに入れ、提示している。その箱ないしカゴに入っている分を行えば終了となる。

視覚的な量で区切ることが出来ない休憩等では、タイマーのアラーム音で、活動の終了を伝えている。

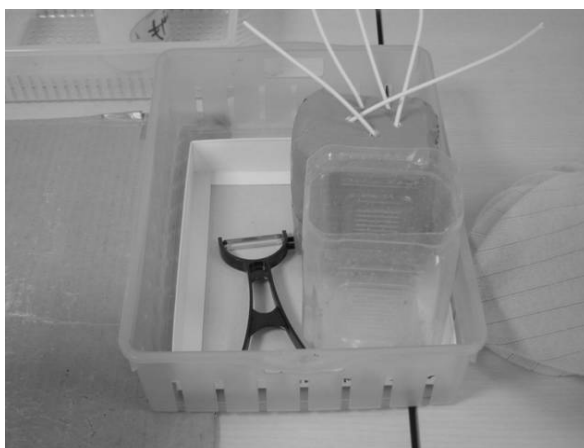


図6 言語のないダウン症の方の銅線作業道具

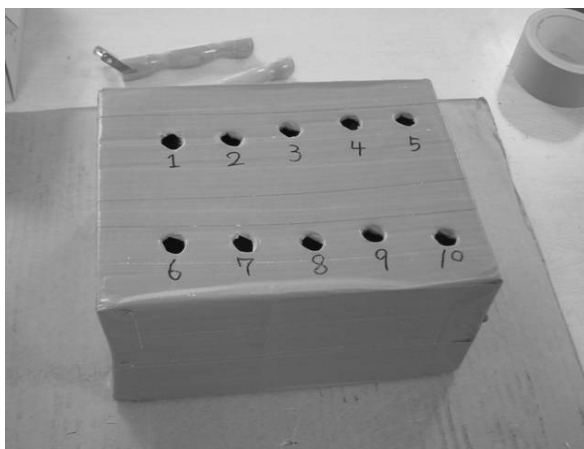


図7 銅線ジグ

次に、作業準備の提示法について説明していく。写真と平仮名を理解できる、聴覚障害を伴うダウン症の方へは、作業に必要な物品を写真

カードで提示し(図8)、自ら作業物品を取りにいけるよう促している。言葉やサインのみでは援助者側からの情報が正しく伝わらないことも、写真カードを見ることで理解し、動き出すことができている。

言語のない方が作業を行う際、常に同じ場所に作業物品を提示し、準備と片付けを行うようにしている。具体的な例として、言語のない方が布さきという作業を行う際、作業物品の提示場所として定めた場所に引き出しを用意した。引き出しを用意するだけでは、そこから準備し、そこに片付けるといったことの理解が難しかった方でも、引き出しの取っ手を引きやすく、赤く目立つものにしたり、引き出しを予め10cm開けておくことがヒントとなり、自ら準備したり片付けることが出来るようになっている。

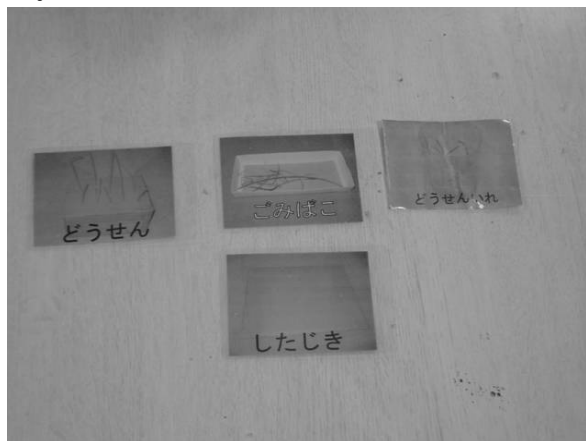


図8 写真カードによる作業物品の提示

作業方法の提示について、一つの具体例を報告したい。

図9は、布裂き作業の方法を提示したものである。布裂き作業とは、はたおりで使用するため、四角い布をジグザグに裂き、一本のひも状にするという作業のことである。裂き始める部分に切り込みを入れ、そこにテープを貼っておくと、本人は、端から順にテープをはずし、裂いていく。テープは、外すことで裂く動作を始めることを意味し、裂いた部分が次のテープの所まできたら、裂き切らずに止めることを意味する。図10は実際に裂いている場面である。テープの手前で裂く動作を止め、テープをはがし、写真の左側に向かって裂いていくという動作を繰り返し、一本のひも状になるようになっている。



図9 布裂き作業方法の提示



図10 布裂き作業

II. 利用者から自発的に情報を発信する為の取り組み

援助者側からの情報を正しく伝える工夫を行い、その結果、常に指示を待っている状態であった言語のないダウン症の方が、カードの提示により情報を正しく理解するようになり、自ら行動を起こすようになった。しかし、自発的に意図を持って他者に働きかけることは依然として少ない状況である。援助者側からの情報を理解できたら、次に、自分から情報を発信できるようになって欲しいと考える。

そこで、自発的な行動が増えてきた言語のないダウン症の方を対象に、情報の理解の次に、自分から周囲に働きかけることができるように、場面を設定し、取り組みを行なっている。

言語のないダウン症の方は、カードを使った取り組みを行う中で、好きな作業種目や余暇カードを指差す、カードをカード入れの箱から取り出し、側にいた援助員に渡す等、少しずつ自らの意思を伝えるようになってきていた。そこで、本人が作業間の休憩の際、好んで飲んでい

るコーヒーに着目し、本人がコーヒーを飲む時に自らその要求を周囲に伝える、という取り組みを行なった。方法としては、本人が自らその要求を周囲に伝えるのを促す為に、本人の机の上にコーヒーカップの現物を提示した。本人は、コーヒーカップを職員に手渡すという動作を行うことで、“コーヒーを下さい”という要求を伝える。必ず受け取った職員がコーヒーを入れ、本人に渡している。

現在、現物の提示で本人は職員に対し、自らコーヒーの要求を伝えられている状況である。本人は画像の抽象化が可能な方のため、今後は現物ではなくコーヒーカップのカードの提示で要求を伝えられるようになるような取り組みを行う予定である。カードによって要求ができるようになれば、他の場面での般化が可能なのではと考えている。コーヒーの要求という一場面だけではなく、その他の様々な場面で自ら意思を周囲に発信することができるように、取り組みを進めていきたい。

Ⅲ. 利用者の自発的な行動を促すための取り組み

職員からの情報を理解でき、要求を伝える事が出来る方については、自分から進んで行動をすることが出来るようになって欲しいものである。

はたおりグループにおいて、本人の自発的な行動を促すために、役割を設け、取り組みを行っている。具体的な取り組みについて報告していきたい。

図 11 は、朝会の際の『日付貼り当番』の様子である。へやに設置しているホワイトボードに当日の日付を貼るという役割で、簡単な単語でコミュニケーションの取れるダウン症の方が、当番をしている。朝会という部屋の利用者全員が参加する中で行い、職員だけではなく他の利用者からも注目され、本人は正しく貼ることで「ありがとう」と評価を受ける。評価を受けることで、“次もやろう”という、自発的に行動する意欲につながることを意図して、このような役割を設けている。

図 12 は、朝会の際の『当日の給食の発表』の場面である。先述した日付貼りと同じ方が担当している。日付貼りと同様、朝会という中で行うため、他の利用者からも注目を受け、『給食の発表』は〇〇さんの担当、というように、その人個人の役割として認識されている。“自

分の役割だ”と自分や周りから認識されることで、自信につながるのでは、と考えている。実際、このような取り組みを昨年度から続けた結果、少しずつではあるが、今年度の 11 月頃から、月一回行われる利用者会において、全体の前で発言をするようになる姿も見られるようになった。

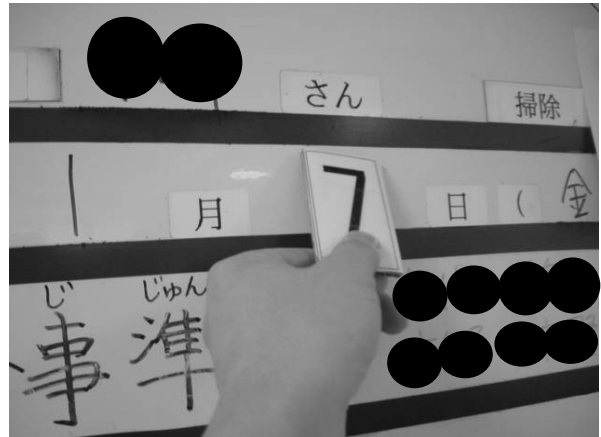


図 1 1 日付貼りの当番

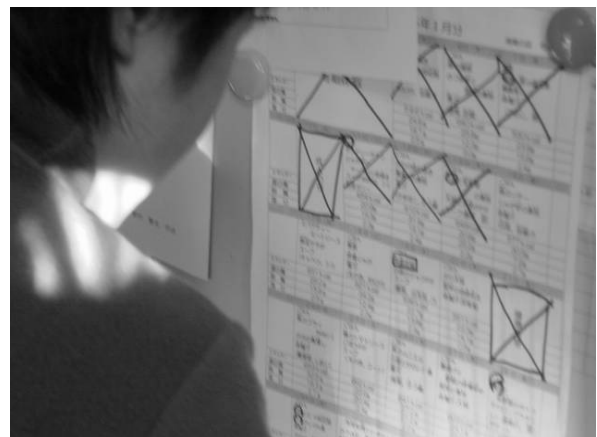


図 1 2 当日の給食の発表



図 1 3 掃除当番の名前書き

図 13 を見ていただきたい。平仮名を模写できるダウン症の方が、当日の掃除当番の名前を書いている所である。正しく書けた場合、必ず

「上手に書けたね」等、口頭で評価を行う。間違ってしまった場合も、否定的な声かけはせず、どこが違うのかを指摘した上で、意欲が低下しないような声かけをしている。本人が書いた紙はホワイトボードに貼り、朝会の場でそうじ当番の発表がある。自分の書いたものがみんなから注目され、評価されることで次への意欲や達成感につながることを意図している。

先述した方とは別の、簡単な単語でコミュニケーションの取れるダウン症の方である（図14）。はたおりグループの利用者が銅線作業で使用する、ピーラーとカッターの管理をしている。写真の奥にある、ピーラーを収納しておく為のピーラーボックスを見ながら、各々のピーラーがきちんと片付けられているかどうかを確認し、チェック表に○、×をつけていく。この方は他の人のために何かをすることや、作業としては銅線を好んでおり、ピーラー管理の役割を任せてから、自発的に「やる」と言ってチェックをつけるようになった。本人の興味のあることに関係した役割を用意すると、自発的に動きやすいようである。



図14 ピーラー・カッターの管理

IV. まとめ

以上、はたおりグループにおけるコミュニケーション支援の実践例を簡単に紹介させていただいた。様々な障害のある方の混在する当グループにおいて、コミュニケーション支援を行うにあたって、大きく3つのポイントに分けられるのでは、と考える。

先ず一つ目は、言語のある無しに関わらず、スケジュールや量を伝える時、カードや現物、ジグ等を使い、視覚的に理解しやすい工夫を行うことである。

視覚的な情報提示の工夫を行ったところ、職員から発信された情報がより伝わりやすく、情報の受け手側にとって理解しやすいということが取り組みを通じてわかってきた。ただ単に視覚に訴えればよいのではなく、その方の理解度に応じた提示方法であることが大切だということも忘れてはならない点である。

二つ目は、特に言語のない方について、与えられた情報を理解しやすくするために、構造化された環境を整えることである。常に同じ場と同じ物品を提示することで、自発的に動き出すヒントになる。

三つ目は、言語のある方について、その方の興味・関心、理解度に応じた役割を任せることである。その役割を通じて、周囲から評価を得ることで役割への達成感を得、意欲や自信となり、自発的な行動や発言の増加につながると思われる。

文献

杉山雅彦・宮本信也・前川久男編著(1999)：発達障害の理解と援助。(小林重雄監修)。コレール社

山本淳一・加藤哲文編著(1997)：応用行動分析学入門。(小林重雄監修)。学苑社